

第3問

次の文章は、源氏と平氏がそれぞれの身内で敵味方に分かれて戦った内乱を描いた『保元物語』の一節である。前半は、勝利した後白河天皇方の源義朝が、敗北した崇徳院方の父源為義と対面する場面であり、後半は、義朝の家来二人のやりとりを中心とする場面である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(配点 50)

(注1) 左馬頭、ともかくも物も言はず、涙をはらはらと流して、「さらば、汝、よきやうに計らひ申せ」とぞのたまひける。(注2) 正清、

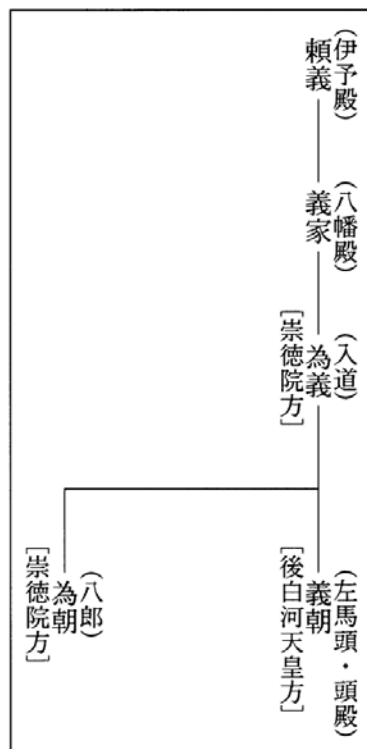
「さ候はば、御対面候ひて、(ア)すかしまゐらせ給へ」と申しければ、流るる涙を押し拭ひて、さらぬ体にもてなし、入道の御前に参り、「義朝、今度の合戦の大將軍として、忠節を致す。数輩の若党討ち死にし、手負ひ候ふ。しかりといへども、いまだ勲功の賞にも預からず候ふのところに、御首を刎ねてまゐらせよと、度々仰せ下され候ふのあひだ、今度の忠賞に申し替へて、御命ばかりをこそ申し助けまゐらせて候へ。ただし、平氏清盛、させる忠功も候はねども、大国あまた賜り、一族朝恩に誇る。義朝など、頭をさし出だすべきやうも候はず。それに、かくて御わたり候へば、石の中の蜘蛛とやらんのやうに思え候ふ。人の口は悪きものにて候へば、いかなる讒言や出で来候はんずらん。東山なる所に、庵室を構へ持ちて候ふ。貴き所にて候へば、かれに渡らせ給ひ候ひて、しづかに御念仏候へかし」と申されければ、入道、まづ涙をはらはらとこぼして、「あはれ、人間の宝には、子に過ぎたるものこそなかりけれ。子ならざらん者、誰かはかく身に替へて助くべき。生々世々にもこの恩忘るまじきぞよ」とて、手を合はせ喜び給ふ。義朝、心中に、「無慙のことかな。ただ今斬られ給はんことをも知り給はず、かくのたまふよ」と思ひければ、A 涙のすすむを、さらぬ体にもてなして、「さらば、正清、御興まゐらせよ」とのたまへば、「承り候ふ」とて、白木なる腰車を引き出だす。(注5) さすがに、なごりの惜しければ、出で遣り給はざりけるを、正清、「疾う疾う」と申すほどに、心ならず乗り給ふ。

夜半ばかりのことなれば、いづこをそことは知らねども、東の方へは行かずして、七条西の朱雀へ引きて行く。(注6) 波多野次郎、力者どもに輿を昇かせて、出で来たりけり。鎌田、朱雀にて車より輿に乗り移り給はんとおころを討ち奉らんと、太刀を

構へ、待ちかけたり。波多野次郎は、いまだこのことよくも心得ざりければ、鎌田が袖を控へて言ふやう、「や、殿、これはいかなる御計らひぞ。このこと、総じて心得ず。」^(イ)すでに失ひ奉らんとこそあんなれ。まことに、入道殿の朝敵とならせ給ふことは、力及ばざることなり。されども、今度、頭殿の大將軍を承らせ給ふといふも、誰故ぞ。入道殿の御威勢なり。東国の輩多く付き奉るといふも、また、入道殿の御譲りの故ぞかし。さこそ勅命力無しといふとも、正しき父の首をばいかでか斬らせ給ふべき。返す返すも口惜しきことかな。明日は天下の口遊となり、人に指を差されさせ給はんずる頭殿の御悪名こそ心憂けれ。そもそも、昔、伊予殿、相模守にて、鎌倉にわたらせ給ひし時は、東八箇国の侍、八幡殿を主と頼まぬ者やありし。その子にてましませば、入道殿も我等が主、その子にてましませばこそ、頭殿も主なれ。中にも、和殿は入道殿の御跡懐にて生ほし立てられまゐらせて、御好深き人ぞかし。いかでかやみやみとして討ち奉らんとはし給ふぞ。助け奉るまでこそなくとも、せめては、かくと申して、最後の御念仏をも勧め奉り給へかし」と言ひければ、**B** 理とや思ひけん、鎌田、「さらば、和殿、その様を申し給へ」と言ふあひだ、義通、車の轅に取り付きて、泣く泣く申しけるは、「**(ウ)** いまだ知らせ給ひ候はずや。頭殿の御承りにて、正清が太刀取りにて、ただ今、車と輿の間にて討たれさせ給ふべきにて候ふなるは」とて、袖を顔に押し覆ひて、涙にむせびてうつ伏しければ、入道、大きに驚きて、「口惜しきことござんなれ。義朝は、さては、だしぬきけるよな。あはれ、八郎がよく謂ひつるものを。かくあるべしと知りたらば、六人の子供、前後に立て、矢種のあらん限り射尽くして、討ち死にして失せたらば、名を後代にあげてまし。さては、犬死にせんずるにこそ。今度の合戦に院方勝たせ給ひたらば、いかなる勲功・勲賞にも申し替へて、なか義朝一人を助けざるべき。あはれ、親の子を思ふほど、子は親を思はざりけるよ。『諸仏念衆生、衆生不念仏。父母常念子、子不念父母』と、仏の説かせ給へるは、少しも違はず。ただし、**C** かくはあれども、全く我が子悪かれとは思はぬなり。願はくは、上梵天・帝釈、下堅牢地神に至り給ふまで、義朝が逆罪を助けさせ給へや」とのたまひも終てず、涙にむせび給ひけり。

(注)

- 1 左馬頭——源義朝。
- 2 正清——鎌田正清。義朝の家来。義朝の乳母子に当たる。
- 3 入道——源為義。義朝の父。
- 4 石の中の蜘蛛——身動きのとれないさま。
- 5 腰車——手で引く車。
- 6 七条西の朱雀——京の七条通りと朱雀大路の交差するあたり。
- 7 波多野次郎——義朝の家来。
- 8 頭殿——左馬頭。義朝のこと。
- 9 伊予殿——源頼義。為義の祖父。
- 10 東八箇国——今の関東地方にあたる八つの国。
- 11 八幡殿——源義家。為義の父。
- 12 跡懐——育ての親。
- 13 義通——波多野次郎。
- 14 轅——腰車の前後に突き出た二本の長い棒。
- 15 八郎——源為朝。為義の子。義朝の弟。
- 16 諸仏……念父母——諸仏は衆生を念へども、衆生は仏を念はず。父母は常に子を念へども、子は父母を念はず。
- 17 上梵天・帝釈……至り給ふまで——上は梵天・帝釈から、下は堅牢地神に至るまで。梵天・帝釈は仏法を守る神、堅牢地神は大地を守る神。
- 18 逆罪——主人や親を害するなど、地獄におちるほどの大罪。



問2 波線部 a ～ d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

24

- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|--------|---|---------|---|---------|
| ⑤ | a | 尊敬の助動詞 | b | 打消の助動詞 | c | 使役の助動詞 | d | 動詞の活用語尾 |
| ④ | a | 受身の助動詞 | b | 打消の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 使役の助動詞 |
| ③ | a | 尊敬の助動詞 | b | 完了の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 尊敬の助動詞 |
| ② | a | 自発の助動詞 | b | 完了の助動詞 | c | 尊敬の助動詞 | d | 使役の助動詞 |
| ① | a | 受身の助動詞 | b | 打消の助動詞 | c | 使役の助動詞 | d | 動詞の活用語尾 |

已然形に接続する。
連体形に接続する。
終止形に接続する。
連用形に接続する。
未然形に接続する。

a

ただ今

斬れ	斬れ	斬る	斬る	斬り	斬ら		
命令	已然	連体	終止	連用	未然		
	れよ	るれ	るる	るる	れれ		
	命令	已然	連体	終止	連用	未然	
給へ	給へ	給ふ	給ふ	給ひ	給は		
命令	已然	連体	終止	連用	未然		
		○	め	む	む	○	(ま
		命令	已然	連体	終止	連用	未然

こと

a

受身

※「れ給ふ」が受身か、
自発か、尊敬かを問う

尊敬なら「せ給は」に、
自発なら心情表現になる。
いずれでもないのが受身

b

知れ	知れ	知る	知る	知り	知ら			
命令	已然	連体	終止	連用	未然			
		ざれ	ざれ	ざる	ざる	ざる	ざる	ざる
		命令	已然	連体	終止	連用	未然	
			ども					

打消

b

※「ね」が打消か、
完了か、を問う

「知ら」未然形に接続
しているので、打消

c

昇 ^か け	昇 ^か け	昇 ^か く	昇 ^か く	昇 ^か き	昇 ^か か	
命令	已然	連体	終止	連用	未然	
	せ よ	す れ	す る	す す	せ せ	
	命令	已然	連体	終止	連用	未然
				て		

力者どもに興を

「にを」で使役の
対象を示す

C

使役

連用形に接続

※「せ」が使役か、尊敬か、動詞活用語尾かを問う

「にを」があるので使役

d

な れ	な れ	な る	な り	に なり	な ら
命令	已然	連体	終止	連用	未然
				て	
				ば	

子 体名詞
言詞

断定

「ま
します
」
尊敬語

「ま
します
」
尊敬語

「ま
します
」
尊敬語

「ま
します
」
尊敬語

「ま
します
」
尊敬語

「ま
します
」
尊敬語

d

※補助動詞「まします」の活用語尾か、使役か、尊敬か、問う

使役・尊敬の「せ」なら未然形に接続する。
「まします」は未然形ではない。

後半はカラーなしです。

a

ただ今					
斬れ	斬れ	斬る	斬る	斬り	斬ら
命令	已然	連体	終止	連用	未然
	れよ	るれ	るる	る	れ
	命令	已然	連体	終止	連用
給へ	給へ	給ふ	給ふ	給ひ	給は
命令	已然	連体	終止	連用	未然
			○	め	む
			命令	已然	連体
					む
					○
					(ま
					命令
					已然
					連体
					終止
					連用
					未然
					こと

a

受身

a

受身

尊敬なら「せ給は」に、
自発なら心情表現になる。
いずれでもないので受身

※「れ給ふ」が受身か、
自発か、尊敬かを問う

b

知れ	知れ	知る	知る	知り	知ら
命令	已然	連体	終止	連用	未然
				ざれ	ざれ
				命令	已然
				ども	ども
				ざる	ぬ
				ず	ざり
				ず	ざら
				命令	已然
				連体	終止
				連用	未然

b

打消

「知ら」未然形に接続
しているので、打消

※「ね」が打消か、
完了か、を問う

「**に**を」で使役の
対象を示す

リキシヤ
力者ども
に
興コシを

昇 ^か け	昇 ^か け	昇 ^か く	昇 ^か く	昇 ^か き	昇 ^か か	C
命令	已然	連体	終止	連用	未然	
	せ よ	す れ	す る	す	せ	使役
	命令	已然	連体	終止	連用	
					て	連用形に接続

※「せ」が使役か、尊敬か、動詞活用語尾かを問う

「くを」があるので使役

子
体名
言詞

なれ	なれ	なる	なり	に	なり	なら
命令	已然	連体	終止	連用	未然	

断定

※補助動詞「まします」
の活用語尾か、使役か、
尊敬か、問う

使役・尊敬の「せ」なら未然
形に接続する。
「ましま」は未然形ではない。

「坐まします」
尊敬語

まし ませ	まし ませ	まし ます	まし ます	まし まし	まし まさ
命令	已然	連体	終止	連用	未然

d